

# 空中漂流一週間

海野十三

青空文庫



## 「火の玉」少尉

「うーん、またやって来たか」

と、田毎大尉は、啣くわえていた紙巻煙草をぽんと灰皿の中になげこむと、当惑とうわく顔で名刺の表をみつめた。前には当番兵が、洩じゅうめん面をつくって、起立している。

ここは帝都に近い××防衛飛行隊本部の将校集会所だった。

「ほう、大尉どの。誰がやって来たのでありますか」

一週間ほど前に、この飛行隊へ着任したばかりの戸川中尉が、電話帳を繰る手を休め、上官の方に声をかけた。

「うむ、例の『火の玉』少尉が、またやって来たのだ」

「えつ、『火の玉』少尉？」

と、戸川中尉は眉を高くあげ、

「ああ六条のことですな。あの六条のやつは、こっちにいましたか」

戸川中尉は、少年のように眼をかがやかせ、入口の方をふりかえった。しかしそこには、誰の影も見えなかった。

そもそもこの「火の玉」少尉とよばれる六条壮介と戸川中尉とは、同期生だったのだ。そして嘗ては、ソ満国境を前方に睨みながら、前進飛行基地のバラックに、頭と頭とを並べて起伏した仲だった。

この二人は、無二の仲よし戦友だったけれど、二人の性格は全くあべこべだった。戸川中尉が飛行将校にもつてこいの細心で沈着な武人であるのに対し、六条の方はその綽名からでも容易に察せられるごとく、満身これ戦闘力といったような感じのする頗る豪快な将校だった。それで二人は、よく仲のよい悪口を叩きあつたものだ。

「なんだ、貴様は。貴様みたいに、数値ばかり気にやんでいと、数値以上の勝利をあげることもなかできやせんぞ」

と六条壮介がからかえば、戸川は戸川で、

「莫迦をいうな。貴様みたいに、戦闘をはじめの途端に数値のことを忘れてしまうようじや、どうせ碌でもない敵兵に横腹を竹槍でぶすりとやられるあたりが落ちさ」

と、やりかえすのであつた。しかしその実、この二人の将校は、互いに相手の長所を尊

敬しあつていたのだ。

真逆まさかこの戸川の言葉が讖しんをなしたわけでもなからうが、六条壮介しよすけのうえにとつぜん不幸な事件が降つて来て、彼は第一線を退かなければならないこととなつた。

その不幸な事件というのは、或る日彼が、ソ連空軍の爆撃の跡を視察するため、崩れかかった家屋の前に立つていたとき、そこへ急カーヴを切り輜しちよう重隊のトラックが驀進してきた。呀あつといつて彼が身をさけた途端に、トラックの運転をしていた兵隊が未熟のためか周章あわててハンドルを切り間違え、あべこべにトラックは半壊家屋の支柱に衝突し、轟ごうぜ然んたる音響とともに、とうとうその半壊家屋を潰してしまつた。そこで屋内へ避けた六条少尉は、不運というか細心の注意を缺いていたというか、その下敷となつた。さつそく全員総がかりで、少尉の身体を掘りだしたが、なかなかの重傷で生命のあつたのがふしぎなくらいだつた。結局そのとき以来、「火の玉」少尉は右腕の自由を失つてしまい、野戦病院に退いて、ついに右腕を上膊じようはくから切断してしまつたのである。

片腕なくなつたのでは、「火の玉」少尉は再び飛行機を操縦することができない。そこで第一線から後送ということになつたが、「火の玉」少尉は誰がなんといつてもきかない。そして頑張がんばりに頑張つたが、いくら頑張つても切断された片腕はいつまでたつても元のよ

うに生えないことが分っていたから、無理やりに内地へ連れかえたのである。

「あいつの云うことは、分っているのだ。ソ連軍の重トーチカ集団を破るのは、俺より外にやり手がないんだから、すぐ第一線に出すよう骨を折ってくれというんだ。もうここへは三四十回も面会にきたもんだが、いくらあいつに泣きつかれても、このことばかりはどうにもならないのでねえ」

と、田毎大尉は困りきった顔で、首を左右にふった。

「右腕がなくてもやれるというのですか」

戸川中尉は、この事件の前から六条少尉に分れて司令部へ出張していたので、以来彼は会わずじまいだった。

「そうだ。俺にはまだ左腕もあれば両脚もあるし、硬い歯の生えている口もあれば、太い頸もあるというんだ。その意気は壮とするが、こればかりはねえ」

そういつているとき、受付の方角から、大きな蛮声<sup>ばんせい</sup>がこつちへ響いてきた。田毎大尉と戸川中尉とは、思わず顔を見合せた。

「しかたがない。おい当番兵。六条少尉をここへ案内してこい」

田毎大尉は、ついにそういった。

「大尉どの。自分もここに居てよろしくありますか」

「ああ、よろしい。ぜひそこにおいて、『火の玉』少尉を慰めてやってくれ」

間もなく、当番兵につれられて、部屋へ入ってきた壮漢、見れば警防団服に身を固めていて、ちゃんと右手もついている。

### 新しい警防団員

「おう、そのいでたちは……」

と、田毎大尉たごがいぶかるのを、壮漢はうやうやしく右手で拳手の敬礼をして、

「はあ、きようは大尉どのに、この姿を見ていささか意を安んじて頂こうと思つて参りました」

「おお、これは戸川——戸川中尉どの。ずいぶん久しぶりでありましたな」

そういう壮漢は、やっぱり「火の玉」六条少尉以外の何人でもなかった。どうしたわけ

か、きょうは「火の玉」少尉、いつになく朗かであつた。

「おお、貴様に会つて、俺は嬉しいぞ」

と、戸川中尉は立ちあがつて、六条少尉の方に手をさしのばした。そのとき中尉は、硬いひやりとしたものを掌てのひらの中に感じた。見るとそれは鋼鉄こうてつと硬質ゴムとでできた「火の玉」少尉の義手ぎしゆだったのである。

「戸川中尉どの。結果において自分の敗北でありましたよ。中尉どのにお目にかかれれば、早速それを申すはずでしたが、きょうまでそれをいう機会がなかつたのです」

「あはは、なにをいうか貴様」

「しかし戸川中尉どの。自分は右手を失つて、見かけにおいては体力を削減さくげんしましたが、その戦闘精神は却かえつて以前よりも旺盛おうせいになったことを言明げんめいいたします」

「ふふん、それは結構だ」

「火の玉」少尉は、そこで急に気がついて田毎大尉に敬礼をし、

「いや失敬いたしました。旧友に会つたものでありますからして、思わず大尉どのへの報告のほうがりになりました……」

「いや、かまわない。が、報告とはどういうことか。まさか原隊復帰の許可が下りたとい

うのでもなさそうだが」

「その原隊復帰のことで、大尉どのをかなりお苦しめました。きょうはそのことではないのであります。これをごらん下さい。自分は警防団に入りました。原隊復帰が許されるまで、警防団で働くつもりであります」

「そうか、それはよかった」

と、田毎大尉ははじめて合点のいった顔である。

「それで部署は、どういうところか」

大尉としては、やはり元の部下の「火の玉」少尉の部署のことまで気にかかるのであった。

「はい、監視班です」

「ほう、監視班とは、なるほどこれはいいところへ配属されたものだ。『火の玉』少尉の監視哨しやうでは勿体ないくらいなものだ」

田毎大尉は本当のことをいった。

「そんなことはありません」

と六条は、言下に「火の玉」少尉らしい活潑な口調でうち消して、

「今日ほど、監視哨の仕事が重大であり、そして困難を伴っていたことは、未だかつてなかったのです。ソ連極東軍の重爆隊は、今夜にも翼をはって帝都の空を襲うかもしれない情勢であります。自分は今夜から、任務につく決心であります」

「ふむ、任務につくといつて、どうするのか」

「はい、気球に乗ることになっています」

「なに、気球に乗る。どんな気球に乗って、なにをするのか」

田毎大尉は、「火の玉」少尉が気球に乗るなどいだったので、少々おどろいた。

「はい、帝都は今夜から、繫けいりゆう留りゆう気球を揚あげることになっています。今夜は一つだけあります、明日から若干数が殖えることになっています。自分は、その最初の一つに乗りこみまして、深夜の帝都の上空をば監視するのであります」

「夜、見えるか」

「はい、午前三時に月が出るのであります。それまではE式聴音器ちやうおんきで、敵機のプロペラの音を探知します」

「ふむ、それは御苦労なことだ。では、しっかり頼むぞ」

田毎大尉は、障害者となっても燃えるような戦闘精神が「火の玉」少尉の胸に宿ってい

るのを知って、大いにうたれた。

その「火の玉」少尉は、田毎大尉と旧友戸川中尉との前を辞するとき、一段とかたちを改め顔面を朱盆しゅぼんのごとに赫あかくして、

「であります、この六条は、一日も早く原隊復帰を許され、例の××軍トーチカ集団攻撃に、ぜひとも一番駆けをいたし、そこに屍しかばねをさらしたいと考えておるのでありますから、この点お忘れなく、御両所の不断の御骨折おほねおりを切望いたします」

儼然げんぜんといい放つて、「火の玉」少尉は廻れ右をして帰っていった。

後を見送つて、田毎大尉は戸川中尉と顔を見合し、

「やつぱり『火の玉』少尉だ。はじめは原隊復帰を諦めたのかと思つたが、いまの言葉では、どうしてどうして、先生なにがなんでも××軍トーチカ集団の真中で戦死をしたいらしいね。はっはっはっ」

といつて、愉快そうに笑つた。

その「火の玉」少尉は、その夜の九時、帝都北東地区の〇〇陣地において、繫留<sup>けいりゆう</sup>気球<sup>ききゅう</sup>に乗りこんだ。そのころ意地わるく南よりの風がかなりはげしく吹きだして、地上に腹<sup>は</sup>匍<sup>ら</sup>つているような恰好の気球はもくもくと揺れていた。

はじめは、この気球の下のゴンドラに、六名の者が乗りこむことになっていたが、いよいよという時になって、ただひとり「火の玉」少尉だけが乗ることとなった。

「一体どうしたのか。まさか怖<sup>お</sup>じ気<sup>け</sup>がついたのでもあるまいに」と、彼は笑った。

「いや六条さん。班長さんはじめ幹部の連中が、いま手が放せなくなったのですよ。貴方<sup>あなた</sup>もついでに、見合せなすつたらどうですかね」

警防団の庶務係の老人がいった。

「私は予定どおり乗りますよ。風が吹いていようが、敵機は来ようと思えば来るんだからね」

「いえ、風——風がはげしいからどうのこうのというのではなくて、なんでもこの〇〇陣

地の裏手の垣かきのところを、怪しい人物が二三人うろついていたという話ですよ。それで班長さんはじめ総さうがかりでいま見廻り中なんです。気味がわるいじゃありませんか」

老人は首をぶるぶる慄ふるわせていった。

「怪しい人物、ははあ本当かな。臆病者には、蚯蚓みみずが蛇へびに見える」

「六条さん、そんなことをいつているのを幹部に聞かれると、うるそうがすぜ」

「なにがうるさいものか。この事変下に怪しい奴の一人や二人うろついているのは当たり前だよ。なにも班長までが騒さわぎまわらなくともいいじゃないか。そんなことは気球に乗らない連中に頼んでおいて、自分たちは予定どおりのるのがいい。敵軍は、こっちにそんな騒さわぎがあるとなかろうと、お構いなしに空襲を仕かけてくるだろうからね」

「そりやそうですが、さつきもこの気球のあたりを探していましたが、その憲兵さんの話を聞くと、先月横浜沖に碇てい船はくしていた貨物船から無断上陸をして逃げたソ連共産党の幹部スパイで、キンチャコフとかいう大物も交っているらしく、なかなかたいへんな捕物なんですよ」

「キンチャコフだって、どつかで聞いたような名前だ。だが、キンチャコフはどこまでもキンチャコフで、監視哨はどこまでも監視哨なんだ。さあ、係員にそういつて予定の時刻

が来たから、早く気球の綱つなをとくようにいつてくれたまえ」

「へえ、やっぱり六条さんは、一人で上へあがるのですか」

「さつきから幾度もそういつているじやないか。係員にそういつてくれ。ぐずぐずしているようなら勝手にこつちが綱を切つてとびあがるぞと、きびしく一本突つっこ込んでおいてくれ」

「えつ、気球の綱を切る？ あなた、いくら冗談でもそんな乱暴なことをいうものじゃありませんよ。気球の綱を切れば、地球の外へ吹き流されてしまうじやありませんか」

「はつはつはつ。もういいから、早く係員に催さいそく促をしてきてくれ」

「へえ、かしこまりました」

老人が向うへかけだしてゆくと、気球のところには六条壮介ひとりとなつてしまった。風は相変らずひゆうひゆうと耳みみもと許うなに唸うなつて、地上わずかに一メートル上のゴンドラが、がたがた揺れる。闇の空をすかしてみると、気球は天に吠えているように巨躰をぐらぐらゆすぶつていて、気になるほど、綱がぎしぎしいつている。

六条の待つている係員は、一向姿をあらわさなかつた。

「なにをしているんだらう」

と舌打して、彼は真暗な××陣地一帯をずーっと見まわした。すると、ときどき螢ほたるの火

のように、懐中電灯がいくつもちらちら点滅するのが見られた。搜索隊にちがいない。

「ふん、やっぱり本当なんだな。怪しい奴がしのびこんだというのは……」

だが、きびしい軍律の中で生活してきた「火の玉」少尉にとつては、たとえ傍に何事があるうと、気球が予定の時刻に上昇しないことについて甚だ不満であつた。

「しようがないなあ。降りていつて、一つうんと文句をいつてやろうか」

と思つていると、ゴンドラが急にごとんと大きく揺れて、地上から二三メートル上に飛びあがつた。それは地上に置いてある信号灯が俄かに遠くなつたことから知られた。

「おや、どうしたのかな」

そういつているうちに、ゴンドラはまた一つごとんと揺れて、また二三メートル上に飛びあがつた。

「はてな、——」

そのとき少尉は、地上の信号灯の前に一つの人影が大童おおわらわになつて綱を解こうとしているのを認めた。

「おお、やっと気球係の地上員がやつて来たんだな。いくらなんでも、たった一人では、ちと無理だ」

そういつているとき、ゴンドラはまた大きくごとんと揺れ、とたんに彼の手はゴンドラの縁ふちからはずれ、彼は芋いものようにゴンドラの底をごろごろと転った。

彼が起き直ったとき、気球は風の中を、もうぐんぐん上昇していた。

地上からは、懐中電灯がいくつも、こつちに向つて動いている。ところがその灯あかりは、どれもこれもしきりに十字を描いているのだった。

十字火信号！ ああそれは「要注意ようちゆうい」の信号であつたではないか。

「なにが『要注意』なんだ！」

と、「火の玉」少尉は、小さくなりゆく地上の灯をみつめていた。

### 「要注意」の信号

「火の玉」少尉が、空中の異変に気がついたのは、それからしばらくして、風の中に××陣地のサイレンの響を聞き、それに続いて××陣地にありつただけの照空灯が、彼の乗った

気球の方に向けられたときだった。

それまでのところは、彼は地上員が多忙たぼうの中を駆けつけて、彼のために繫けいり留ゆう気球第一号の綱をゆるめてくれたものとはかり考えていた。

ところが、それから後のサイレンやら照空灯のものしい騒のちぎがはじまるに及んで、彼はやつと或る疑惑を持ったのである。

「おかしいなあ。一体地上ではなにを騒いでいるのだろう」

彼の外に、誰も乗らないといていたが、やはりまだ乗る者があつたのではなからうか。それで「要注意」などと騒いでいるのではなからうか。

だが、それにしては、なぜ「出発待て」の信号を発しなかつたのであろうか。「要注意」の信号は、どうも腑ふにおちない。

いや、腑におちないのは、こうして××陣地ありつたけの照空灯が、こっちの気球のあとを追駆けてくることだ。こっちの出発が、陣地の方に都合がわるければ、綱を引張つてこの気球を引きおろせばいいではないか。なぜそうやらないのであろうか。

さすがの「火の玉」少尉も、すこし不安な気持になって、照空灯の眩まぶしい光こう芒ぼうを手でさえぎりながら、地上の騒ぎをじつと見下していた。

そのうちに、彼ははじめてたいへんなことに気がついた。それは彼の乗っている気球の綱のことであった。綱が一本、ぷつんと短く切れて、照空灯の光の中にぶらぶらしていたのである。

「おや、あの綱は切れているぞ」

思わず彼は、声をあげて愕おどろいたが、それから更に他の綱に眼をうつしたとき、もつと大きな愕おどろきが彼を待っていたのである。

「呀あつ、あの綱も切れている！」

彼はゴンドラの縁ふちにしがみついたまま、一本の綱から他の綱へと、後を追っていった。

その結果、気球を繫けいりゆう留りゆうしていた六本の綱が悉ことごとく切断されていることを発見したのである。言葉をかえていえば、もはやこの気球を地上に繫つないでいる一本の綱も無いのであった。

ああ 繫けいりゆうさく留りゆう索さくのない気球は、一体どこへ行くのであろうか。

「うん、こいつは失敗しまった！」

「火の玉」少尉の全身を、熱湯ねつとうのような血が逆流した。

「失敗しまった、失敗しまった、失敗しまった！」

彼はゴンドラの縁をつかんで、動物園の猿のようにゆすぶった。時刻がたつに従って、

大きくなる災禍さいかであつた。

地上では、こんどは照空灯が、十文字にうごいて、「要注意」を知らず。

「要注意」も、今さら遅いという外ない。

そのとき彼は、ゴンドラの中に、無電器械がありはしないかと気がついたので、腰をか  
がめて、あたりをふりかえつた。

「うむ、あるぞ。あれがそうらしい」

ゴンドラの中の、微かすかな灯火のうちに、無電器械の黒ぬりのパネルが眼についたので。  
彼は飛行将校として、一応無電器械の知識もあつたから、どっちが受信器のパネルで、ま  
たどっちが送信器のパネルか、見分けがついた。彼はいそいで受信器を頭にかけるとスイ  
ツチを入れた。真空管が、ぱつと明るくついた。

しばらくすると、受信器の奥から、声かとびだした。

「ハア、××繫留気球第一号。こっちは××陣地です。ハア、××繫留第一号。こっちの  
声が聞えますか。只今〇〇飛行隊と連絡をとり、飛行機隊が追跡してくれることになりま  
したから、安心して下さい。ハア、××繫留気球第一号！こっちの声が聞えましたら、  
そっちから電波を出して下さい」

××陣地の通信員の声だ。

それを聞くと、六条は勇氣百倍の思いがした。地上でも、この気球が繫留をはずれて空中に漂流しだしたことをちやんと気づいているのだ。そして飛行隊が急遽出動して、この気球の救援に赴くことになったそうだ。このうちは、こっちの所在を地上なり救援の飛行機に知らせることさえ忘れなければいいのだ。それは無電器械の送信器を働かせてマイクへこっちの声をふきこめばいいのである。

六条は、左手をのぼして、無電器械の送信器にスイッチを入れた。パイロット・ランプが明るくついた。真空管はキャビネットの中で光っている。彼は揚げ蓋をひいて、その中から長い紐線のついたマイクをとりだし、口のところへ持っていった。

「ハア、こっちは繫留気球第一号です。六条壮介が送信をしています。いま気球は、風に流されつつ、ぐんぐん上昇しています。気圧は只今、七百……」

といて、六条が傍の夜光針のついた気圧計に眺め入ったとき、突然何者とも知れず、マイクを握った彼の左手をぎゅっと掴んだ者があつた。

## 思わざる怪影

「ああつ、——」

豪胆ごうたんをもつて鳴る「火の玉」少尉も、全く思いがけないこの不意打には、腹の底から大きな愕おどろきの声をあげた。

闇夜あんやの空を漂ひょうりゆう流中のゴンドラの中には、彼ただひとりがいるばかりだと思つていたのに、意外にも意外、突然マイクを持つ手首をぎゅつと掴まれたのだから、この愕おどろきも尤もつともであつた。

「だ、誰だ！」

味方か、敵か？

「火の玉」少尉がうしろへふりむくのと、彼の左手首のうえに、焼きつくような激しい痛みを覚えるのと、それが同時であつた。

「あつ、な、なにをするッ」

といったが、手首は骨まで折れたかと思うようなひどい疼痛とうつうで、眼があげていられな

いくらいだ。でも「火の玉」少尉の眼は、その奇々怪々なる相手の姿をとらえた。

「き、貴様、何者だ！」

怪漢は、白い歯をむきだすと、彼の背後から組みついた。ひどい剛力ごうりきだった。

「ヤボンスキー」  
「日本人、黙れ。生命が惜しければ、反抗するな」

そういう相手の言葉は、ロシア語であった。

（ははあ、ソ連人だな！）

この闖入者ちんにゆうしやは、さつきもいったとおり、なかなかの剛力だった。そのうえ、「火の玉」少尉は、左手首に不意打をくついで、いまだにそれが痺しびれているのだった。だから力もなんにも入らない。それを承知でか、相手は六条の頸くびにまきつけた腕をぐんぐん締めつけてくる。

「うーむ、こいつ……」

「火の玉」少尉にとっては、二重の危難きなんであった。いずれも予期しなかった不意打の危難であった。たいていのものなら、もうこの辺で他愛なく気絶をしているところであるが、危難が大きければ大きいほど、強くはねかえすのが「火の玉」少尉の身上だった。彼はいま、もうすこしで息が停ろうというのに、横眼をつかつて、ゴンドラの中の大切な器械

具の配列位置を頭脳の中につめていた。

「日本人、はやくくたばれ！」

「ちんにゆう 入の怪ソ連人は、さらに六条の頸にまいた腕に力を入れた。

「うーむ」

と唸うなつて、「火の玉」少尉の上半身が後にのけぞる。

「日本人、まだ死なぬか！」

「うーむ」

「火の玉」少尉の上半身は、蝦えびのようにうしろにのけ反ぞった。彼の背後から組みついている怪ソ連人までが、硬い少尉の頭を胸にうけかねて、ゴンドラの縁ふちにひどく押しつけられた。

「こら、そう反そつくりかえるな。始末にわるい奴だ、うん」

と、怪ソ連人が、六条の身体を前に押しかえしたそのときのことだった。

「えい、やつ！」

ふりしぼるような叫びごえが、今の今まで死んだようになっていた、「火の玉」少尉の咽喉のどの奥からとびだした。と、彼の身体が水の中にもぐるような恰好で、すんと沈んだ。

「わわっ、——」

奇妙な悲鳴とともに、少尉の背後に組みついて勝ち誇っていた怪ソ連人の身体が、南<sup>ナンキ</sup>京<sup>ン</sup>花火のように一転して、どざりと前方へ飛んでいった。

このとき「火の玉」少尉がもし手を放したとすると、怪ソ連人の身体は、ゴンドラの縁<sup>ふち</sup>の上をとび越えて、あつという間に、なんの掴<sup>つか</sup>まりどころもない空間に放りだされていたことであろう。少尉はそれを心得ていたと見え、相手の袖を手許へぐつと引張りつけたので、相手はゴンドラの角<sup>かど</sup>で、いやというほど尻の骨をうったまま、身体を逆<sup>さか</sup>さにしてずると籠の中にくずれ落ち、そのまま動かなくなつた。なにゆえに敵を助けるのか、「火の玉」少尉の心中は測<sup>はか</sup>りかねた。

「どうだ、もう一度来るか」

少尉は、足を伸ばして怪人の頭を蹴とばした。だがかの怪人は、気絶でもしているのかなんの反抗も示さなかつた。

その間にも思つて、「火の玉」少尉は再びマイクをとりあげ、急ぎの報告を電波に托<sup>たく</sup>すつもりで、

「ハア、こっちは××繫留気球第一号の六条です。電波はつづいて出ているでしょうな。

このゴンドラの中に、ソ連人が一名忍びこんでいました。どうやらゴンドラの外からのぼってきたものようです。今気絶しています。あとでよく調べあげて、知らせます」

そういう少尉の声は、普段話をしてるときとすこしも変つていなかった。これがどこへ飛ばされるとも分らない漂流気球の中に、心細くも生き残っている人の声とは、どうしてもうけとれなかった。

### キンチャコフ

だが、この「火の玉」少尉の電信は、予期した応答が得られなかった。

変だなど思つてしらべてみると、マイクの紐線コードがいつの間にかぷつんと切られているのであった。これでは、地上から応答のないのも無理ではない。紐線は、さっきの格闘のときに切断したものにちがいない。彼は、すぐその修理にとりかかった。早いところ地上との通信連絡を回復しておかないと、気球がどこへ流れていったか、皆か目もく手て懸がりがなくな

る虞おそれがあるのである。

ちらりと地上へ目をやると、××陣地はもうマツチ箱の中に豆電球をつけたように小さくなっていた。高度はすでに三千メートル、方角がはつきりしないが、どうやら北の方へ押し流されている様子だ。

風はいよいよつよく、ゴンドラがひどく傾いているのが分った。

「火の玉」少尉は、マイクに紐コード線をつけなおすことに、つい注意を注そぎすぎたようであった。外に現れたその態度は、周章あわているように見えなかったけれど、その心の中には狼ろ狽うばいの色がなかったとはいえない。なにしろ早いところ地上との無電通信を回復しなければ、一大事が起ると思いこんで、マイクの修理に一生けんめいになりすぎ、怪しいソ連人に注意を向けるのを怠おこたったのだ。

その怪しいソ連人は、依然として身体を逆さにしたまま叩きつけられたようになっていたが、彼の両眼は、うすく開いて、「火の玉」少尉の手許てもとをみていた。

そのうちに、怪人の一方の手がそろそろとうごきだして、上衣うわぎのポケットの中をさぐりはじめた。

しずかに、再び彼の手首が現れたときには、逞たくましい形をした一いっ挺ちようのピストルが握ら

れていた。怪人は、身体を逆さにしたまま、ピストルを持ち直して、「火の玉」少尉に狙いをつけた。

「火の玉」少尉は、そのときやつと気がついた。彼は、なにかゴンドラの中のものが動いたように思つて、顔をあげてみると、この戦慄<sup>せんりつ</sup>すべき武器が、こつちを向いていたのである。

「おいキンチャコフ。俺を撃つのはいいが、そんな無理な姿勢じゃ、命中しやしないよ」

「火の玉」少尉が、流暢<sup>りゆうちやう</sup>なロシア語で一喝<sup>かつ</sup>した。

「なに、どうしてこつちの名を……」

怪ソ連人は、相手の日本人がいきなりロシア語を喋<sup>しゃべ</sup>りだしたうえに、自分の名前まで呼んだのであるから、びっくりしたのも無理ではない。尤も<sup>もつと</sup>「火の玉」少尉としては、ロシア語なら得意中の得意だし、キンチャコフの名は、××陣地を出る前に庶務の老人から聞いたのを、このとき思い出しただけのことだ。

「おいキンチャコフ。貴様が××陣地で皆に追駈<sup>おし</sup>けられて、仕方なくここへとびこんだことは知っていたぞ」

「それがどうした。なにが仕方なくだ。わしはこの気球で脱<sup>のが</sup>れるつもりだから、繫留<sup>けいりゆうさ</sup>

索<sup>く</sup>をナイフで切ってしまったんだ」

「そんなことは云わなくとも分っているぞ。貴様は、この気球でうまく脱れられるつもりなのか」

「脱れなきゃならないんだ」

「脱れるといっても、この気球は風のまにまに流れるだけなんだ。どこへ下りるか、それとも天へ上ったきりで下りられないか、分ったものじゃない」

「出鱈目<sup>でたらめ</sup>をいうな、ヤポンスキー日本人。気球はいつかは地上に下りるもんだ。天<sup>てんくう</sup>空に上ったきりなんてえことはない」

と、キンチャコフが生意気な抗議を試みた。

「そこまで分つていれば、いいではないか。この気球が下におりるまで、貴様一人で風や雨と闘うつもりか、それとも貴様と俺と二人で闘った方がいいと思うか」

「火の玉」少尉は、話をうまいところへ追<sup>おいこ</sup>込んでいった。

「ふん」

「それが分つたら、ピストルなんざポケットへ収<sup>しま</sup>つとくことだ。下手な射撃をして、気球にでも当れば、どういうことになると思うんだ。たちまち気球は火に包まれ、俺たち二人

は、火を背負いながら地上に飴あめのように叩きつけられて、この世におさらばを告げることになるだろうよ」

「……」

「おい、お前は思いきりのわるい奴だな、キンチャコフ。そのピストルなんか収しまめて、これからどうすればわれわれは無事地上に下りられるかを研究して、すぐさま実行にかかるのだ。無駄なことはしないがいい」

そういわれて、キンチャコフはつい兜かぶとを脱ぬいだ。彼は不承不承ふしょうぶしょうに、逞たくましい形のピストルをポケットの中に収こいこんだ。そして達磨だるまが起きあがるように、身体をごろんと一転させて、「火の玉」少尉と向むいあつた。

「ははあ、お前がキンチャコフか。だいぶん俺よりも年上らしいが……」

「火の玉」少尉は、どこまでも相手を呑んでかかった。

呉越同舟ごえつどうしゅう

それから、この奇妙な日ソ組合せによる空中漂流がつづいた。

マイクロフォンの修理はできたけれど、これをつけても送信器は働かなかった。マイク以外に、故障ができたものらしく、専門家でない六条には、すぐさまその故障箇所を見つめることができなかった。

だから無電器械は、受信器だけが役に立った。

「ハア、××繫留気球第一号！」

といつまでもこつちを呼んでいるのが聞えたが、その声は、だんだんと強さを減少していく。それはいよいよ××陣地から遠く距へだたつたことを意味するのであった。

無電は、しきりに救援の飛行隊が出勤したことを報じていた。

たしかに、それに違いなかつた。午前二時ちかくだったであろうか、赤青の標ひょうしき識しをつけたすこぶる快速の偵察機らしいのが一機、漂ひょうりゅう流りゅう気球に近づいた。

「おいキンチャコフ。俺も振るから、貴様もこの懐中電灯をもって、こういう具合に振れいいか」

六条は、キンチャコフにも信号をさせて、二人のうちのどつちかが偵察機に認められ

ばいいと思つたのである。

キンチャコフは、あまり気がすすんでいなかったようであるが、それでも協力して懐中電灯を輪のように振つた。

「おお、あそこを飛んでいるんだから、もう見えてもよきそうなものだが……」

と、「火の玉」少尉は、上を指した。黒暗澹こくあんたんたる闇をぬって、三つの飛行機標識ひようしきと灯とうがうごいていく。それはだんだんこつちへ近づくように見えた。

「うまいぞ。たしかにこつちへやってくる」

「すこし変だよ。あれじゃ高度が高すぎて、気球の上を通りすぎてしまいそうだ」

キンチャコフが、なかなか理窟りくつのあることをいった。

「通りすぎられて、たまるものかい。おい、今だ。信号灯をもっと振れ」

二人は、懸命に懐中電灯をうち振つたつもりであった。

だが、この飛行機は、ついにキンチャコフのいったとおり気球の上方、約五百メートル近いところを飛び過ぎ、やがてだんだん遠くなつてしまった。

「畜生、とうとう行かれてしまった」

「どうも無理だよ。こんな小さな灯あかりじゃ仕様がな。そのうえ、千切ちぎつたような雲が一ぱ

いひろがつていて、上からは案外見透しがきかないんだぜ」

キンチャコフは、得意らしく喋りたてた。「火の玉」少尉は、キンチャコフが、ソ連仕立のかなり優秀なスパイであることを見破った。そうなると、これからさらに一層、油断はならないわけだ。

やがて午前三時をすこし廻つて、月が出た。それから一時間半ほどたつと、東の天が白くなつた。

前夜以来、しきりに呼びつづけていた××陣地からの無電が、急に小さな音響になつてしまつた。そして間もなく、なんにも聞えなくなつた。

それつきり救援の飛行機も、こつちへ追駈けてこなくなつた。

ただ涯しなく拡がった雲海うんかいのうえを、気球は風のまにまに漂流しつづけるのであつた。その外ほかに、生物の影は、なに一つとしてうつらぬ。このひろびろとした雲海は、天国へ到る道であるのかもしれない。二つの屍しかばねを埋めるのは、どの雲のあたりであろうかなどと、「火の玉」少尉もあまりの荒涼こうりようたる天上の風景に、しばし感傷の中におちこんだのであつた。

## 鋭い牙

「ねえ、六条。気球が上昇をストップしたようだよ」

寒そうに身体を叩いていたキンチャコフが、送信器の解体に夢中になっている六条にいった。  
「たたた」

「ふん、なんだか動きもしくなつたようではないか」

六条が相槌あいづちをうった。高度計を見ると、実に八千メートルの高空だ。いくら夏でも、これは寒いはずだ。

気球は、ぴーんと膨れふくきつている。

「これじゃ天井にくつついた風船みたいで、一向面白くない」

キンチャコフが呑気のんきそうな口を叩いた。

「おい、貴様は無電の知識をもつとらんのかね」

六条がたずねた。

「さあ、さっぱり駄目だねえ」

と、キンチャコフは気のなさそうな返事をした。キンチャコフの方が、六条よりも死生を超越ちようえつしているらしく見える点があつて、「火の玉」少尉も少々癪しゃくにこたえている。

しかし、単にぐうたらに生きるものと、帝国軍人としてその本分に生きるものとは、どうしてもちがうのがあたり前で、六条の方が臆病だというわけではない。

「おおつ、気球が下りだしたぞ。ああ、ありがたい。温くなるだろう。ふん、あの辺の雲の中へとびこむな」

キンチャコフがはしやぎだした。

六条は、とうとう無電器械のことをあきらめてしまった。空中漂流以来、戦友戸川のことを思い出し、こつちもこんどは一つ細さいしんかつ心且沈着しんかくにしようかと努力をつづけてきたわけだが、たかが無電器械一つと思うのが、どうしたってこうしたって、うんともすんとも直りはしないのだ。

(やつぱり、自分の柄がらにないことは、駄目なんだ)

彼ははじめて悟りに達したような気がした。と同時に、今までの妙な気鬱きうつが、すうっと散じてしまったようであつた。

「ほう、なるほど下るわ下るわ。いよいよ墜落の第一歩か」

「あまり嚇おどかすなよ」

と、キンチャコフがいつて、

「へんなことをいうと、きつとそのとおりになるという法則がある。ちと慎つつしめよ」

「なあに、今のうちにこれでも喰つておけ。そうすれば元気になるだろう」

六条は、携けいたい帯口糧こうりょうをゴンドラの戸棚の中からひっぱりだして、キンチャコフにも分けてやった。戸棚の中には熱糧ねつりょう食しょくだとか、固形こけいウイスキーなども入っていた。なしろ予めあらかじ六人分の食糧が収おさめてあったので、食糧ばかりは当分困らない。

ただ困ったのが水だ。水は、ゆうべ庶務の老人が持ちこんでくれたが、一人一日分しか入れてない。

携帯口糧は口の中で一杯になった。水を上から注ぎこまなければ、とても咽のど喉をとおらない。といつて水は大事にしなければ、この先どんなことになるか分らない。六条は、目を白黒させながら、これも同様に目を白黒させて携帯の口糧こうりょうをばくついているキンチャコフの顔を見やった。

「おう、雲だ。いよいよ下るぞ」

ほんの僅かの間に、気球は密雲の中に包まれてしまった。見る見るうちに、服はびつしより水玉をつけ、やがてそのうえを川のように流れおちる。二人の頭のうえからも、小さい滝がじゃあじゃあと落ちてくる。仰げども見えないけれど、気球に溜った水滴が集つて、上からおちてくるのであろう。が、なにしろなにも見えない。ゴンドラの中まで、磨硝<sup>すりガラ</sup>子を隔<sup>へだ</sup>てて見ているような調子だ。キンチャコフは、このときとばかりに、顔のうえを流れおちる雨<sup>あまみず</sup>水を、長い舌でべろべろ嘗<sup>な</sup>めまわしている。

密雲が下にある間や、その密雲の中をくぐりぬけている間は、そうでもなかつたけれど、気球が密雲をすりぬけて、それを上に仰ぐようになったとたん、俄<sup>にわ</sup>かに墜落感がつよく感ぜられた。眼下はひろびろとした一面の海<sup>うなばら</sup>原であつた。そして海面までは案外近くて、ものの四五百メートルしかない。

「ああ、海だ」

「おお海だ。どこの海だろうか」

「この色は、日本海だ」

六条のいったことは、間違いでなかつた。

「日本海なら、船がたくさん通るだろう。墜落しても大丈夫助かる」

とキンチャコフは、俄かに喜色をうかべていったが、なに思ったか、ポケットから例のピストルを出して六条につきつけた。

「なにをするんだ、キンチャコフ」

「いや、嚇おどしではない、本気なんだ。船が見えたら、貴様は綱をひいて、気球の瓦斯ガスを放出して下において、助けられるつもりだろうが、それについて、ちと注文があるんだ」

「それはどういうことか。早くぬかせ」

「日本の船せんぱくが通つても下りおないことさ。つまり日本以外の船舶に救助されることをもつて条件とするのさ。もちろん、貴様に異議はいわせないがね」

と、キンチャコフはピストルの引金にしかと指をかける。

「火の玉」少尉は、別に愕おどろいた顔もしなかった。

「そんなものを握にぎっているよりは、下を船が通りやしないかがどうか、生命びろいのためにはその方が肝腎かんじんのことだぜ」

「ふん、うかうかそんな手にのるもんかい。飛び道具の方が勝にきまってるなあ」

キンチャコフは、本性を露骨ろこつにあらわして、「火の玉」少尉に擬ぎしたピストルをひっこめようとはしない。

(うるさい奴だ)

と思つたが、六条は別にピストルがこつちを向いているのを気にするようでもなく、ゴンドラの中から朝霧のかかった海面をじつと見下みおろしていた。キンチャコフの方が、かえつてふうつと溜ため息をついた。

はて  
涯なき漂流

不連続線という悪戯いたずら者がなかつたら、二人のうちのどつちかは、間もなく日本海を航行中の汽船のうえに助けられたかもしれないのだ。そしてその滞空記録も、僅か十何時間で終わったかもしれないのだ。

ところが、どこにひそんでいたのか、不連続線という悪戯者が漂流気球の正面にぶつかったからたまらない。

「おう、気球がまた上りだしたぞ」

「あつ、ちがいない。おお六条。あの黒い雲を見ろ」

「思いきつて、ここで瓦斯ガスをぬいて海面おへ下りようではないか」

「なにを。下りるのはいやだ。わしは泳げないんだからな」

「俺が助けてやろう」

「いやだといったらいいやだ。このピストルが眼にはいらぬのか」

キンチャコフはピストルをふりまわした。

「うーぬ、貴様。さつきからピストルをかまえて、それで俺おどを嚇おどかしつけているつもりなのか」

「なにを、来るか日本人。来てみる、一発のもとに赤い花が胸から咲きでるだろう」

「莫迦ばかやろう野郎！」

といったのと、轟然ごうぜんたる銃声が耳許にひびいたのと、ほとんど同時だった。

「うーむ、やったな」

六条は、突然右胸きょうぶ部に焼火箸やけひばしをつきこまれたような疼痛とうつうを感じた。胸に手をやっ

てみると、掌てのひらにベツトリ血だ。とたんに彼ははげしく噎むせんだ。ががががと、咽喉のどの

奥から音をたてて飛びだしたのは、真赤な鮮血だった。

「畜生、やりやがったな」

「火の玉」少尉は重傷に屈せず、奮然と立ち上った。そしてキンチャコフがピストルを握り直そうとしたところを、すかさずとびこんで足蹴にした。ピストルが、ぽーんと上に跳ね上ったと思つたら、ゴンドラの外にとびだした。

「あつ、失敗つた！」

と、キンチャコフがゴンドラの外に手を伸そうとしたとき、踏みこんだ「火の玉」少尉は、腹立ちまぎれに右手でびしりとキンチャコフの脳天をなぐりつけた。その右手は、ただの手ではなかった。鋼鉄製の義手だった。キンチャコフは獣のような悲鳴をあげると、へたへたとゴンドラの底にその身体を折り崩した。

「火の玉」少尉は、相手がうごかなくなつたのを見ると、そのまま自分も瞳とその場に倒れた。しかしそれから十数分とたたないうちに、彼はまたむくむくと頭をもちあげた。そしてとうとうその場に起きあがって、また口から血を吐いた。

「うーむ」

彼はぐつと歯を喰いしばった。そして胸のあたりをさすっていたが、やがて上衣をまくって白い襯衣をひきだし、べりべりと破った。彼はその破った襯衣で、傷口をおさえて血

止めにした。なお彼の眼と手とは動いて、そこにあつたズツクの布を引裂きにかかつたが、ついに及ばず、そのズツクの布を砲かかえたままその場にどつと転がった。

それが「火の玉」少尉の、これまで連続していた記憶の切れ目であつたのである。

そのころ、人事不省ふせいの兩人をのせた気球は、不連続線の中につき入つて、はげしく翻ほうろ弄うされていた。ものすごい上昇気流が、気球をひっぱりこんだから、たまらない。今の今まで下降一方だつた気球は、あべこべにぐんぐん上昇をはじめた。一千メートル、二千メートルは、瞬間にとび越して、まるで地球の外にとんでいってしまうかのように、なおもぐんぐんと雲と雲の間を昇つていった。あたりは、岩窟がんくつに入ったように真暗で、そして電ひようがとんでいた。折々ぴかりとはげしい電光が、密雲の間で光つた。

それからどの位経つたか、よく分らない。キンチャコフの方が先に気がついたらしく、そのころ六条は、氣息奄々きそくえんえんとしてゴンドラの底に横たわつていた。キンチャコフが六条を絞め殺そうとすれば、わけないことであつたけれど、彼は別になんにもしなかつた。それはどういふわけだかよく分らないが、キンチャコフは、もう再び六条を襲うのがいやになつたのかもしれないし、或いはまだ鮮血を胸から顔から一杯に彩いろどつたすさまじい六条の

姿に怖じ気をふるった結果かもしれない。もちろんキンチャコフも、意識だけがよみがえったというだけで、ゴンドラの底に身うごきもしないで転っていることは、六条の場合と大差なかつたのである。

「うーむ、よく眠つた」

これが意識を回復した六条がいつた最初の言葉だつた。

それからまたあと三時間ばかり、彼は昏々こんこんとして眠つた。

その次に目覚めたとき、彼は本当に気がついたのであつた。ゴンドラの中には飛びちつた血の痕あとがもうくろずんでいた。ふしぎに生きているなという気持であつた。彼は左手をのばして、あたりを幾度も幾度もさぐつていた。やがて硬い丸いものが二つ三つ、彼の指先にふれた。

握りしめて、眼の前へもつてきて開くと、それは固形ウイスキーであつた。ああ天の助けだなと、そのとき彼は思つたことであつた。

彼は、貪むさぼるように、その二つを喰べた。それはまるで靈薬れいやくのごとくに、彼を元気づけた。彼は思わず、最後の一つを口のところへ持つていきかけたが、急にそれをやめて、

「キンチャコフ！」

とよんだ。

「……」

キンチャコフの腕が、六条の腕の方につつーつと搦からむように近よってきたが、固形ウイスキーは、ぼんと二人の間に落ちたままになって、それから数時間を、二人は昏々として眠った。

それから一日二日たつたと思うころ、六条もキンチャコフも、相変らずゴンドラの底に寝たままではあるけれど、どうやら口きだけ利けるようなどころまで体力を回復した。それは六条が食糧の入っている戸棚を知っていて、それを引出しては分けあつて喰べたからである。しかし困つたのは、水が一滴もなくなつたことである。二人は、寝たままで、ときどき口を利いた。

「おい、キンチャ。もうどの辺を漂流しているかなあ」

「この気球は、最初北へいつて、その翌日は西へ流れた。そしてもう四、五日にはなるだろう。すると、これはどうも外蒙がいもうかザバイカル区の辺まで流れて来ているよ」

「そんなになるかなあ。よし今日はなんとかして腕の力で起きあがる練習をして、一度ゴンドラの外をのぞいてみたいものだ。俺は、太平洋の真中あたりへ出ているような気がす

るが」

そしてまた、二人は昏々こんこんと眠った。

どれだけ眠ったか、飛行機の爆音がするので、二人は目が覚めた。気をつけていると、飛行機は、ゴンドラの周囲をぐるぐる廻っているらしい。ときどき、ゴンドラの縁ふちと気球との間に、飛行機のような形が見えるのだけれど、二人とも視力がよわっていて、はっきり見えない。

そのうちに、サイレンらしいものが鳴るのが聞えた。

「気のせいかな、××陣地のサイレンと同じ音色だが……」

「なにをいうんだ。あれはザバイカル管区の号笛ごうてきだ。わしはよく知っている」

それから暫くして、二人はいきなり激しい衝撃をうけ、あつと思う間もなくゴンドラから放り出された。とたんに二人とも気を失ってしまったのは無理ではなかった。気球が下くだりに下つてついにゴンドラが大地にぶつかったのだ。

その翌日、「火の玉」少尉は病院のベッドで目を覚ました。おやと思つて目をあげると、そこに田毎大尉や戸川中尉の顔があったので、びっくりした。それからの歓喜は、ここに綴つづるまでもないが、彼ののついていた気球の下りたところは、不思議にも実に七日前に離陸

したもとの××陣地であつたのである。まるで嘘のような出来事であつた。言う者も聞く者も、ともに不思議な出来事に、驚きょうたん嘆たんの連発であつたが、これこそ不連続線のなせる悪戯いたずらであつたとは、後に「火の玉」少尉が元気を回復してからの種明たねあかしであつた。

キンチャコフは、不運にも、ゴンドラが地上に激突したとき、当りどころが悪くて脳のうし震盪しんとうを起おこし、そのままあの世へ逝いつてしまったそうである。



# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第9巻 太平洋魔城」三一書房

1989（平成元）年9月15日第1版第1刷発行

初出：「名作」

1939（昭和14）年9月

入力：tatsuki

校正：土屋隆

2004年4月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 空中漂流一週間

海野十三

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>